三重大学教育学部研究紀要　第70巻　教育実践（2019）527－534頁

書道鑑賞に関する実践的研究

－ 鑑賞後の学生の変化を中心に －

林　　朝　子*

Educational Research on the Appreciation of Calligraphy

－ the Changes of Students through the Appreciation －

Asako HAYASHI

要　旨

本稿は、三重大学教育学部「書道Ⅰ」で行った、書作品の鑑賞の取り組みを取り上げる。履修学生38名のレポートを分析し、鑑賞を通して、学生の書への関心や書表現への意欲、子ども達への教育への考え方にどのような変化が表れたのかを明らかにする。【書表現全体に関する点】【書写から書道へのつながりに関する点】【子どもへの文字教育・書写教育に関する点】【自身の書表現に関する点】の4点から、学生の意識の変容と本取り組みの意義について考察する。

キーワード：書表現、鑑賞、個性、書写と書道

１．はじめに

2018年度前期「書道Ⅰ」で行った書道鑑賞を取り上げ、学生の鑑賞に対する意識や鑑賞観点を明らかにすると共に、書の鑑賞を通じて、書そのものへの関心、書の表現意欲や教育への考え方にどのような変化が表れたのかを見ていく。

表現と鑑賞は「不即不離」の関係にある [1] とされるように、書では、書くことと見ることは双方が密接な関係にあるものである。「鑑賞」については、解釈に幅があり、概念が定まっているわけではない。本稿では、藤森（2014）に基づき、「視覚的に対象を捉え、その美を味わうこと」[2] とする。また、書の鑑賞に関しても、西洋の芸術理論に基づく鑑賞と東洋の伝統的な芸術理論に基づく鑑賞の2つに大きく分けられる。双方に共通しているのは、視覚的な面での「造形性」であり、本稿でも造形性から鑑賞を始める立場をとる。作品を見る際、まず造形性から入り、その次の段階として、その造形性を構成する要素へ進むと考えるためである。

２．取り組み概要

本取り組みは、2018年前期に開講した「書道Ⅰ」の中で行った。この科目は中学校国語科教諭免許取得必修科目であり、履修者38名全員が免許取得予定である（小学校教諭免許も取得予定者が多い）。この科目では、楷書を取り上げており、前半は中学校国語科書写の内容、後半は中国古典作品 [3] を取り上げ、実技を中心とした授業である。

授業を行う中で、学生の書への関心の低さを感じ、2016年度より5月下旬〜6月上旬に開催される「みえ文化芸術祭・みえ県展」での鑑賞を取り入れている [4) 5)]。鑑賞前には、以下に示すような鑑賞の基本的なポイントを提示するのみで、書鑑賞の詳細な指導は行っていない。鑑賞方法の知識が十分でない状態で、各学生の書への関心度や書を見る力の向上を目指しているためである。具体的には授業内で20分ほど時間を取り、以下ように鑑賞方法を伝えた。

〔鑑賞の流れ〕

1）直感的（直観的）鑑賞

作品全体を見渡し、直感的に「いいな」「おもしろい」など何か心を動かされた作品を選ぶ。

2）分析的鑑賞

1）で取り上げた作品になぜ心を動かされたのか、その要因を次の観点で詳細に分析する [6]。筆者の半

＊教育学部 国語教育講座

切作品を例示しながら、①～⑤の観点を紹介した。
①運筆
②構成：全体、文字・文字群
③墨色：濃淡、潤滑、墨継ぎ
④用材：紙、筆、表装など
⑤落款：落款の文字、印

３．対象データ

本稿では、以下のデータ①と②を分析の対象とする。
①初回授業でのアンケート
　初回授業で、書経験や鑑賞経験等の背景を確認するため、アンケートを行った。
②県展鑑賞レポート
　県展鑑賞後にレポート提出を課した。レポートには選んだ作品、直感的鑑賞、分析的鑑賞、感想を記述するよう指示し、字数は 2000 字以上とした。また、作品を見て、文字の模写や構成の全体像を写す等も課し、図の使用を条件とした。言葉だけではなく、実際に字形模写や全体の構成を描き取ることで、作品をより詳細に見ることにつながると考えたためである。

４．学生の背景

履修者 38 名の書経験や鑑賞経験等の背景について確認しておく。

4-1．書塾経験の有無

書塾経験有は 16 名、無は 12 名であった。経験有の場合は、小学校から中学校までが多く、現在も継続しているのは 1 名であった。

4-2．高校芸術科書道選択の有無

書道選択有は 10 名、無は 18 名であった。有 10 名中､8 名は書塾経験者であり､無とした 18 名の理由は、音楽や美術の選択や、書道の科目がなかったとの回答であった。

4-3．展覧会鑑賞経験の有無

1）小中学校の書初め展
15 名が有で、その内 12 名は書塾経験者で自分の作品を見るためと回答した。
2）高校の書道授業や書道クラブの作品展
有は 6 名に留まり、理由は「クラブに友達がいた」「書道授業の課題のため」等であった。
3）一般の書道展
有は 11 名、無は 27 名であった。有 11 名の回答は 2 名が「自分の作品を見るため」であったが、その他は「美術展のついでに」「祖母に連れられて」「塾で見に行った」というコメントであった。

1）～3）の鑑賞経験が無い理由として一番多かったのは「機会がない」であった。次に「興味・関心がない」、「情報がない」が挙げられた。これらの記述から、多くの学生が自ら書作品を見ようとする意識は低く、また、興味関心自体をあまり持っていないと考えられる。

4-4．心を動かされた書作品

有は 10 名であり、具体的な内容は「大字パフォーマンス」4 名、「黒紙に白い墨で書いたイベント」1 名、書塾や書道の先生の作品 2 名、巻物作品 1 名、多数字作品 1 名、インスタグラムの作品（具体的な作品内容は書かれていない）1 名であった。パフォーマンスやイベントという回答からは、特大サイズの紙に大きな筆で書かれるため、書が書かれる過程に強く感動を受けた部分が大きいと考えられる。

4-5．知っている書家（現代、古典）

11 名が武田双雲、1 名が紫舟を挙げた。テレビや雑誌等で取り上げられることが多く、目にする学生も多いのであろう。一方で、王羲之、顔真卿、楮遂良、橘逸勢を挙げた学生もいたが、全員が書塾経験有、高校書道選択有の学生であり、古典の知識があったのであろう。

4-6．墨の濃淡の好み

濃い墨を好むとしたものが 33 名、薄い墨を好むとしたのは 3 名であった。その他、「考えたことがない」1 名、「どちらも好き」1 名であった。濃い墨を好むが圧倒的に多数となったが、1 名「考えたことがない」と回答したように、学校や日常の中で目にする墨は濃墨であり薄墨はほとんどなく、多くの学生が実際には墨の色の違いを意識したり気づいたりした経験がほとんどないのではないかと推測される。

4-7．漢字と仮名の書のイメージ

1）漢字
主な回答は「かっこいい」13 名、「力強い」7 名、「かたい」3 名であった。漢字の「かっこいい」は強さや勢いから感じるかっこよさを表すと考えられる。
2）仮名
主な回答は「やわらかい」10 名、「やさしい」2 名であった。
1）2）より、漢字と仮名で強弱・硬柔といった相反するイメージを持つ傾向がうかがえる。書塾や高校書道選択の経験がない学生にとっては、仮名作品をほとんど見る機会がなく、イメージするのが困難な学生もいたようである。

4－8．書道と絵画の違い

記述内容は大きく次の 4 つに分けられた。
1）色
書道は黒と白で成り立っているが、絵画は様々な色彩があるという記述がもっとも多く、20 名が色につい

て挙げていた。

2）一回性

書道は「一発勝負」「重ねない」といった記述が4名であった。

3）取り上げる対象

書道は文字が対象となるという点に触れていたのが4名であった。書は表現する対象が文字であり、文字としての構造の維持が必要とされる表現方法であることを認識できている記述である。また、文字を表現することから、文字や文章からのメッセージ性も同時に有する場合があるとの記述もあった。

4）雰囲気

書道は和風で、絵画は西洋という記述が4名あった。

1）～4）の他に、「書道は右利きしか書けない」という記述があった。これは、主として書写の授業の影響が強いと考えられる。書写では起筆を45度程度が適当と指導されているが、その角度は左手で持った筆では非常に表現が難しい。そのため、このような記述が出たのではないだろうか。書写指導の在り方を見直す必要性があると感じた。

5．直感的鑑賞と分析的鑑賞の傾向と考察

ここでは、直感的鑑賞と分析的鑑賞を取り上げ、学生が鑑賞対象として選んだ作品と分析観点の傾向を見ながら、考察を加えていく。なお、（　）内の数字はコメント数、A～X、a～lまでのアルファベットは記述した学生を表す。また下線部は筆者が加筆したものである。

5-1．好む作品

100点の作品が並ぶ中、学生が選んだのは、調和体[7] 24名、漢字12名、仮名2名であり、篆刻を選んだ者はいなかった。書塾経験や高校書道選択の有無は関係なく、多くの学生が調和体を選択した。

調和体選択24名の内11名が同じ作品を選び、その理由として　直感的鑑賞で書かれたコメントでは、「力強さ(7)」「堂々とした(2)」「どっしり（1)」「迫力(1)」「しっかり（1)」という見た目の強さに引かれる記述があった。また、8割の作品が242cm×61 cmの縦作品が多い中、この作品は正方形（120 cm×120 cm）で、形の上でも目に付いたとする記述も見られた（6)。

また、調和体を選んだ24名に共通していたのが、文字としての読みやすさであった。具体的には「読める（5)」「一字一字（7)」「漢字・平仮名・カタカナ（5)」という記述が見られ、文字として読めている、理解していることがわかる記述が見られ、書かれている内容が読めることも作品を取り上げる一要因となっていることがうかがえる。一方で、実際に「書道のよさとして文字が実際に伝えるメッセージや表現があると思うが、そのメッセージを読めないと鑑賞する楽しみも感動も大きく損なわれる（R)」「読める調和体以外はどう見たらいいのかわからなかった（X)」という記述もあり、判読性の程度により、学生の作品選択が左右されている可能性が指摘できる。

さらに、漢字を選択した12名中4名は同じ隷書作品を選んだ。その理由としても「一字一字が独立している」「読みやすい」という記述があり、調和体と同じように判読性との関連が考えられる。

5-2．分析的鑑賞の傾向

次に、分析的鑑賞の内容を詳細に見ていくこととする。直感的鑑賞で感じた「強さ」「柔らかさ」「勢い」「明るさ」などが作品のどの点に起因するのかを明らかにするのが分析的鑑賞である。先述した①～⑤の観点別に学生のレポートから具体的な記述を取り上げ、鑑賞の傾向を見ていく。なお、学生のレポートからの引用は原文のままであり、〔　〕は対象とした作品分野を示す。また、内容には複数の観点に触れているものも多く、以下で取り上げるコメントも他の観点の内容を含んでいるものもある。

①運筆

点画や文字を表現する際の筆の運び方や使い方に関して触れているコメントは23であった。

C：〔調和体〕一般的にかすれると聞くと弱くか細いイメージを持ちがちだが、ここでのかすれにはその文字の最後でしっかりまとめる力を持っているように感じた。その理由としては、<u>各文字がかすれる直前まで力強く書かれている</u>ため直後のかすれの弱さを消しているのでないかと思った。

Y：〔調和体〕「かすれ」の部分が何か所か見られたが、文字の中で方向転換をしたりするところは墨が残っていること、そして同じく「かすれ」の直線部分もある程度同じ太さ、濃さで書かれていることから、<u>流れるように、というよりは、しっかり、力強く書いている</u>印象も受ける。ただ、「靄が流れて」のところの「靄」「流れ」という字は<u>筆を滑らかに動かしている</u>ような感じも見える。例えば「靄」の雨冠の三画目の折れているところや、「流」の三画目、また最後の払いのところなどである。

B：〔調和体〕<u>極端に遅い運筆は用いられていない</u>ように感じた。滲みやすい紙質が影響しているのかもしれないが、<u>すらすらと書いている</u>ような印象を受けた。またつなげ字ではないにも関わらず、最初からかすれている字があることを考えると、この作品を書く時に、<u>筆者なりの目に見えない運筆の流れがあるのかもしれない</u>と思わされた。

F：〔調和体〕<u>「はね」「はらい」「折れ」の弱さ</u>だ。作品全体で<u>「とめ」の部分は強く</u>表現されているが、<u>「はね」ていない</u>箇所があったり、<u>「はらい」が弱く「とめ」のように</u>なっている箇所があったりした。また「へ」という文字は、<u>「折れ」がない</u>ため、<u>ゆるやかなカーブ</u>を描いていた。これらの筆遣いによって、一文字一文字が丸みをおびた字になっていると同時に、作品全体にずっしり重みがある印象を感じた。

V :〔細字仮名〕作品に奥行きがあり単調さを感じない。筆の遅速や筆圧の強弱によって表現されていると感じた。「繊細」な作品という印象は、筆遣いの影響が大きいと思う。細かい部分でもあまりかすれていなかったので、綺麗に細かく丁寧に書かれているという印象になったのだと思う。

M :〔漢字隷書〕筆を 45 度[8]にせずに書いているところも特徴だと言える。

「益」や「雲」などに見られる「点」のように、普通であれば斜めに筆をおろすところを横にして書いている。

e : 全体的に線が太かったことからも、筆をゆっくりと動かして書かれたものでないかと推測する。書の中で、比較的細い部分も多少は見られたが、筆先で素早く動かして書いた細さではなく、ゆっくりとした動きの中での細さで、弱々しいものではなかった。始筆と終筆が太くなっていたことから、書き始めと終わりは筆を紙から離すまでの時間が長かったのではないかと思う。

実際の文字の点画を取り上げ、その点画がどの程度の力を入れ、どのぐらいの筆圧や速度で書かれているのかを想像している様子がわかるコメントである。実際に作品を見ながら、模写をしたり、指で書いたりする過程で気づきも深まっているようであった。また、e は「実際に筆で書いてみて、この書き方の難しさを体感することができた」と記しており、筆で点画を再現しようと試みる中で、筆の特徴を踏まえた運筆が体感できたと思われる。

②構成

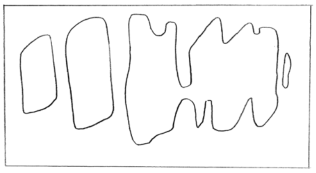
構成を見るポイントとして、全体と文字・文字群で捉え、字形や余白などに着目するように指導した。構成に関わるコメントは 65 あり、その内、字形や余白に関するコメントが 61 と多くを占めた。字形と余白は観点として比較的見やすく、多く取り上げられる結果に結びついたと思われる。

i :〔漢字行草〕作品の全体の形について見ていく。これは縦長の作品であった。三行構成となっており、右側に 10 文字、真ん中に 9 文字、一番左に 9 文字でその下に名前と篆刻が押されていた。

N :〔調和体〕1 列目の 4 文字と 3 列目の 4 文字は高さや並びが紙を 4 等分するように均等に配置されているが、真ん中となる 2 列目だけが明らかにそれを無視している。2 行目の 1 文字目と 3 文字目が少し平べったく押しつぶされ、2 文字目の「羲」に押しのけられているような配置である。

R :〔調和体〕文字と文字の間も極力詰めて書かれているため一行当たりの文字数も多く、同じ面積の紙を使用している他の作品は 7〜9 文字程度なのに対して、この作品は 11〜13 文字という詰め込みぶりだ。しかし、それでいてごちゃごちゃと雑多な印象をあまり抱かせず、むしろすっきりと整っているような感じを受けるのは、1 つ 1 つの文字がはっきりと見やすいこと、行間の余白をたっぷりとっていることによるものであろう。

G :〔細字仮名〕固まりごとに書かれているため、全体的に余白に統一感がない。また、本作品の文頭は一文字分ほどの余白を開けて書き進められている。それによって、文頭が少しずつ斜めに下がっている。そしてまた文の始まりで元の高さに戻るというのを繰り返している。

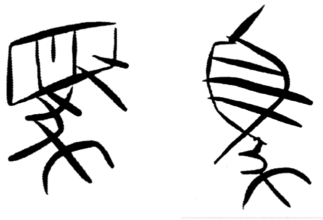


漢字、調和体作品に関しては、行数が 3〜5 行程度のものが多く、行間も均等である。そのため、行間としての余白についての記述は多く見られた。文字間としての余白に関する記述は多くはなかったが、NやRのように字数と字間について気づけている様子も見られた。

L :〔調和体〕「し」は 4 つ出てくるが、全て形が異なる。

T :〔調和体〕比較的画数の多い「麗」と「羲」という漢字は大きく書かれているように感じた。また平仮名の「と」は横長でつぶして書かれており、その下の平仮名の「の」も少し横長に書かれている。「羲」という漢字が大きく縦長に書かれているため、その下の「と」「の」という平仮名は横長に小さく書かれているのではないかと考えた。

K :〔漢字篆書〕画数の多い漢字は大きく、画数の少ない漢字は比較的小さめに書かれている。作品の中に同じ文字が 2 つ書かれているのだが同じように書かれてはいない。



g :〔漢字行草〕楷書の「飛」は 9 画であるが、下で示すようにこの作品の「飛」は右上の点々の部分がなく、普段楷書で字を書く時には見られない右から左に筆が運ばれているように見える。（中略）このように続けて書くことで文字の空いている部分が少なくなり、はっきりとした印象を持つ効果があると考える。

J :〔漢字行草〕4 行ぎっしりと文字が書かれており、文字と文字の間の余白はなかったが、文字の中で余白が作られていた。例えば「柳」という字は 9 画目の線の長さが延ばされており、左側半分に余白が生まれる。（中略）余白を上手く使うことでこの作品は窮屈感がなくなり、読みやすくバランスの取れた作品になったのではないだろうか。

同じ字を書く場合には、全て異なる字形で表現し、変化を加えていることに触れている。行書や草書での表現により、楷書で書いた場合とは異なる字の中の余白の出し方についても気づきが見られた。また、字の大きさも多く取り上げられており、字間が狭く詰まっている場合には、字の中で余白を取り、全体の圧迫感を押さえているなど、文字と文字の関係、そして、文字から全体への関係

を捉えていると示唆できる。

③墨色

墨の濃淡や潤滑、墨継ぎに関するコメントは 19 見られた。

O :〔調和体〕「暮」という字以外は最後まで同じ墨の量を保ったままで書かれていた。滲みがなく、墨が飛び散ったような跡も見られなかった。（中略）かすれを少なくすることで紙の白と墨の黒とで色の違いがはっきりし、存在感のある作品に見える。

k :〔調和体〕勢いよく入った最初の一画はどれも墨が濃い。はらいや最後の方はかすれているものが多い。そのかすれている部分と墨の濃淡の差がこの作品の特徴として大きく映し出され、趣が出ている。墨一つとっても、濃い部分やかすれて薄い部分を分けて使うことで、より美しい作品になっていることに驚いた。

g :〔漢字行草〕紙の素材も関係しているのかもしれないが、1 画目や 2 画目の筆の入り部分がにじんでいるものが多く、全体にはっきりとした力強い印象を出していると考えられる。大部分の文字は 1 画目の墨が濃いが、ところどころ 1 画目から墨が少なく大きくかすれている文字もある。このことから最初の文字で多くの墨を筆につけ、続けて 5、6 文字書いていると考えられる。

G :〔細字仮名〕墨をつける回数が少ない。それは全体的な濃さの不均一さに表われている。文頭でも「かすれ」が出ていることから、墨をつけていないことが分かり、かすれが少ない濃い部分で墨をつけたことが分かる。作品の書き始めから書き終わりの中で、筆を硯に持って行く回数は私たちが一般的に書道で字を書く場合に比べて非常に少ない。

E :〔調和体〕作品を読むときの特徴をそのまま書いているのではないだろうか。例えば、ある短歌に出てくる「あしひきの」という 5 文字でも、「あ」から「の」を順に読むにつれ、声の大きさは小さくなっていく。大きめの声で読む文字は濃く、小さめの声で読む文字は薄く、書かれているように感じた。

「墨が多くかすれていない＝濃墨」「かすれている＝淡墨」と解釈していると思われる記述であった。「墨の潤滑」という用語に慣れていないことが影響したと思われるが、潤滑に置き換えて考察を加える。作品の潤滑の変化に気づき、そこから墨継ぎの箇所を捉え、作品の流れの把握までできているようである。また、自身の墨継ぎの回数と比較し、実際に墨継ぎをしながら作品を書く過程がイメージできているのであろう。F は読める調和体を取り上げていることもあり、音と墨継ぎの関連にも触れている点が興味深い。

④用具用材

紙、筆、表装などを想定していたが、7 つのコメントは全て紙に関するものであった。

f :〔漢字隷書〕紙は真っ白ではなく少し黄味を帯びていたように見えた。墨と紙の色が、白と黒とはっきりした差になっておらず、作品全体の柔らかさを感じたことに影響しているのではないかと思った。

D :〔調和体〕正方形の紙に書かれ、色は薄い黄土色または明るい茶色と表現できるものが使われていた。この紙によって、文字がより一層上品でしみじみとした趣が感じられるものになっているのではないかと思う。

V :〔細字仮名〕紙は淡いオレンジ色で所々キラキラしていた。綺麗な色のキラキラ下紙に、柔らかく崩した文字で書かれている作品が印象的だった。また、縦に長い紙ではなく、横に長い紙に書かれており、圧迫感や威圧感を感じなかった。

分析として触れたのは 7 名であるが、レポートの最後に書いてもらった感想では、ほぼ全ての学生が作品の大きさに驚いていたことから、実際には多くの学生が紙のサイズには圧倒されていたと思われる。多くが縦長長方形であるため、正方形や横長の形式は特徴的に感じたのであろう。また、色も基本的には白であるが、黄色やオレンジ色といった白以外の紙の色は初めて見る学生も多く、非常に印象に残ったようである。V が取り上げている紙は、仮名で使われる加工された料紙であり、淡い色の紙に金銀箔が散らされており、美しさを感じたのであろう。

⑤落款

落款の文字や印について触れていたコメントは 10 であった。

c :〔漢字隷書〕印は朱文印（雅号印、通常、白文印の下に押す）、白文印（姓名印、通常、主文印の上に押す）の 2 つが押してあった。調べてみたところ、印の押し方はルールに基づいたものであることがわかった。また、印の上に、作品の最後に作品名が書かれていたが、ここだけはこれまでの書体とは全く異なり、流れるように書いていた。

e :〔漢字隷書〕作品の最終行は 18 文字であり、他の行と 6 文字分の余白の差があったが、その部分にぴったり収まるように落款が書かれていた。これによって作品全体が長方形になり、整えられていたように思う。落款の文字は、他の書とは違い、細かく小さめで、筆の柔らかさを感じる書き方であった。最後の部分の書き方を変えたことで、作品にメリハリが生まれ、引き締まったように感じた。落款印も正方形であり、作品全体にうまく調和していた。

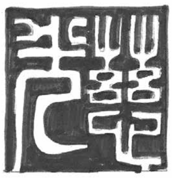
K :〔漢字篆書〕印は 1 つ四角い、白文印が押されていた。その隣には名前以外にも文字が書かれている。他の作品は、印と名前のみ書いている場合が多いため、作者のオリジナリティが感じられる。作者の書いた作品の名前が最初に書いてあり、最後に作者の名前が書かれていることがわかった。それだけでなく、途中に文字が書かれているのだが、読解不可能のため何と書かれているのかを解明することはできなかった。このように名前だけを書くのではないことがわかり、落款にも個性を出すことができ、工夫されているのだとわかった。

k :〔調和体〕4 つの印が押されている。（中略）4 つも印が押されているのを見た時は、なぜこんなにも押すのだろうかと疑問に思った。遊印は作品の仕上がりを引き締めたり、風雅を高めたりするために押すそうで、作者の個性を感じることができた。朱色が入ることで、作品全体に引き締まった印象を持つことができる。

G :〔細字仮名〕印は白文印のみ押されていた。他の作品には芸名のように使う朱文印を使っているものもあった。

本作品の印は作者の名前の平仮名部分を多く使っていた。漢字の部分もくずして平仮名に似た丸みのある簡易なものにして使われていた。作品の柔らかさに、印の平仮名の丸みが非常に合っていて、最後まで優しい感じを受けた。

F:〔調和体〕印は白文印が1つ押されていた。読みやすかった文字とは反対に、印に書かれた文字は解読することができなかったが、作者の名前である「慈光」なのではないかと考えた。「慈」の草冠が鹿のように表現されている点や、「光」の足の部分があらぬ方向に曲がっている点が、独特で面白いなと感じた。



落款について取り上げていたコメントは、かなり細部まで鑑賞している様子が伺えた。単に、朱文印か白文印、押印数、姓名（雅号）の署名だけでなく、作品名など書き添えられていることまで触れられている。また、落款で用いられる書体についても、本文とは異なる書体で書かれていることも取り上げられている。落款の書体は本文と同様の書体でもよいとされるが、一般的には本文よりも柔らかい書体で書くことが多く、c と e はその点についても触れていた。e は更に落款の書体の変化が作品全体を引き締める役割があることにも気づけたようである。k は、黒と白の作品の中に朱の色が入ることで作品全体が引き締まると感じており、更に、遊印について自ら調べる積極的な姿勢も見られた。G と F では、印そのものの書体について記述があった。多くの印は篆書体を用いるが、G は細字仮名の作品を取り上げており、印も仮名にあった書体になっていると指摘している。また、F は印には作者の名前が書かれていると予想し、具体的な字体の面白さを感じている。

以上、直感的鑑賞と分析的鑑賞の傾向を詳細に取り上げ、考察を加えた。分析的鑑賞で取り上げられたコメントには①運筆、②構成に関するものが多く、偏りも見られた。しかし、各々が取り上げた作品に関して、詳細に分析した結果が記述されており、直感的鑑賞で感じた作品の印象の要因を分析的鑑賞で明らかにできているといえる内容であった。

６．感想から見えるもの

ここでは、レポートのまとめの感想内容から、鑑賞を通して学生にどのような変化が見られたのかを明らかにしていく。まず、鑑賞全体への感想として「おもしろい」「楽しかった」「飽きなかった」という、鑑賞そのものを楽しめたというコメントが 22 あった。感想は、大きく次の4点にまとめられた。【書表現全体に関する点】【書写から書道へのつながりに関する点】【子どもへの文字教育・書写教育に関する点】【自身の書表現に関する点】である。具体的なコメントを取り上げながら、考察を加える。

【書表現全体に関する点】

b:1つ1つに特徴やこだわりがあり、興味深かった。自分の個性を輝かせながら、のびのび書いている。

Y:様々な字体が見られておもしろい。文字の大小など要素を少し変えるだけで印象が違って見え、見ていてとても楽しいと思った。

J:一筆一筆に気持ちを載せられ、見た目として現れるおもしろさを感じた。

X:シャーペンなど均一の線ではわからない感じである、書く時の流れのようなものが見えて、筆の動きまでわかるようだった。

P:普段のシャーペンとは異なり、1つ1つの字が息づいている印象。

a:日常の文字は活字や自分のメモ程度で触れるぐらいで、活字に慣れてしまっていて、同じ人の書でも全く同じ文字はないから刺激的だった。

O:小中学校の展示と異なり、紙や言葉や書体が全て異なり驚いた。書写は個性を出すよりも、いかに手本を忠実に表せるかが中心であり、筆で表現する幅の狭さを感じた。

V:小中のとき習っておらず書写がきらいだったが、書展を見て文字への価値観が変わった。

d:直感的鑑賞で感じたことを様々な観点から結び付けていくのが、パズルが埋まっていくようで楽しかった。

h:1つの作品をじっくり見ていく中で普段自分が書いているときには気づかないようなことにも目がいくようになった。

O:長い文書の作品がほとんどで、どのような環境・体勢で書かれているのかとても興味を持った。

1つ1つの作品が全て異なっており、個性を感じている記述が多かった。分析的鑑賞をすることで、作品に関わる要素が少しでも変化すると、全体の印象も大きく変化することも触れられていた。また、日常のシャープペンシルの文字や活字では表せない、感じられない、毛筆での表現の幅の広さも感じている様子であった。O は書かれた環境や体勢にも意識を向けており、実際に書く過程をイメージしている様子がうかがえる。

【書写から書道へのつながりに関する点】

f:基礎を学ぶことは大切だが、楷書できれいに書くことやお手本通りに書くことが求められているのではないと感じた。筆の使い方やバランスなど基礎を学んだ上で毛筆でしか表現できないものということを考えて書道をしていきたい。

a:書写ではきれいに上手に書くことが求められるが、それを乗り越えた先の自由に表現できる楽しさのある書道があることを伝えたい。

D:書道は芸術であり、その字の辞書的な意味だけではない、作者の感情や伝えたいことを表現できるものである。書道でそれらを表現するためには、筆を思いのままに扱える力が必要である。そのためにも国語科書写の授業は、子ども達に筆や墨を使用する基礎的な力を身に付けるために重要であると感じた。

T:選んだ作品は「とめ」「はね」「はらい」をきちんと守っているわけではない。それにも関わらず全体として一つ

にまとまっており、芸術性を感じる。これはおそらく基本を踏まえているからこその応用であり、自分にはまだできないと感じた。

H：書の基本をマスターしたら枠にとらわれず書きたい。

書写と書道の違い、そして、書写と書道のつながりや関係性に気づいている記述が見られた。学生の多くは「書写と書道は別のもの」「書写は整った字、書道は芸術的な字」と全くつながりのないものとして考えていると感じてきた。「筆や鉛筆などの筆記具を用いて文字を表す」という共通点があることから、書写での学びは書道の基盤となることは感覚的には捉えられていても、実感できていない学生が多かった。しかし、鑑賞後のコメントからは、書写で学ぶ運筆や字形表現の基礎が書道へのつながっていくという点を感じ取れたようである。教師となった場合にも、書写での学びが書道という芸術表現に結びついていくことを理解した上での指導かどうかによって、書写での指導内容は大きく変わるであろう。

【子どもへの文字教育・書写教育に関する点】

g：一緒に行った友人が好きという作品はバラバラで毛筆が苦手と感じる子どももいろんな字を見て好きだと感じる字があり、それを書いてみたいと思えば、その子にとって毛筆がすごく身近なものになる。将来、子ども達 1 人 1 人が書に親しめるように今回の経験を生かしたい。

T：書道を通して自分の字が上達する喜びを感じ、書くことに楽しさを見出せるように指導したい。

U：自分が書写を好きでなかったのは単純におもしろさがなかったからだ。技術だけでなく、書のおもしろさや鑑賞の楽しさも合わせて伝えられる教師になりたい。

j：毛筆の豊かな表現を子ども達にも伝承していきたいと思った。実際に見て学べる機会も与えたい。

I：今まで書道に対して苦手意識があった。（中略）今回書展に足を運ぶ機会があったことにより、私も書道への興味、関心が増したように思う。だからこそ、生徒たちにも多く書道などに触れ合う機会があればいいと感じた。

c：書写できれいな字読みやすい字も一通りだけではない。そういった「味」を教え、生徒が書けるように指導していくことも授業には必要だろう。

D：「手で書かれた文字」と向き合うことで、手で書かれる文字には心を動かく力があると改めて感じた。今後学校現場でも情報機器が多く使われることで仕事の効率化が進められるだろう。そして今まで以上に「書く」ことが「キーボードを打つこと」「ボタンや画面で操作すること」に変わっていくことが予想できる。しかし、今回の鑑賞を通して、手書きの文字を大切にしていきたいと強く思うようになった。教師になったとき、子どもの提出物や連絡帳にできるだけ手書きのコメントをしたい。

子どもたちに毛筆で文字を書くこと、手書きで文字を書くことの楽しさを伝えたいというコメントが多く見られた。【書写から書道へのつながりに関する点】で取り上げた内容にも重なるが、書写の学びは整った文字を書くことという技能面に焦点が当てられる領域である。書写での学びの中で何が表現できるようになるのかというスモールステップを提示し指導することは必須であるが、同時に、ステップを重ねた先にどのような表現が可能になるのかという最終目標についても伝えていく必要があり、学生のコメントはその点に気づけていると言えるだろう。

【自身の文字表現・書表現に関する点】

K：自分も伝えたいこと、表現したいことを工夫して、書けるようになりたい。

G：自分の作品にも生かしていきたい。多様な表現を子ども達に提示するためにもこれからも書展をみたい。

T：いつか力強くかつ美しい作品を書いてみたいという願望がある。授業の一時間一時間を大切し、しっかりと基礎を身につけていきたいと思っている。

W：教師になったとき、教えられるように、もう少し勉強しておきたい。

c：教える側に立つ私たちこそ生徒に書きたいと思わせられるような味のあるきれいで読みやすい字をかけるようにならなければならない。

Q：子ども達に指導する自分が適当に書かないようにしていきたい。

P：元々文字自体は好きだったが、今回改めて生き生きとした文字達を見るとやはりかっこいいなと思うと同時に、自分でもせめて見ることができる程度には書けるようになりたいという思いを強く持った。これから生きていく中で文字を書くという動作は数えきれないほど行っていく。その中で、毛筆にしろ硬筆にしろ、文字を生かすことができるように努力していこうと思った。

自身の書の表現力向上について触れている上記のコメントの他に、作品鑑賞での疑問点を自ら調べたという記述も見られた。第 5 章の⑤でも取り上げた「遊印」についてだけでなく、「涙」の「大」が「犬」の具体例、草冠の 3 種類の書き方、王羲之のいう人物についてなど、積極的に調べようとする姿勢に、書表現への関心の強さが感じられる。また、多くのコメントは、教師となる立場、子どもたちに字を見られる立場からのものであった。教師として求められる書字が可能となるための努力の必要性を認識できていると考えられる。「読みやすい字」「適当に書かない」「見ることができる程度」という記述があるが、その背景には、一点一画の運筆を押さえ、丁寧に書くことで文字が大きく変わることを意識しているのではないだろうか。

7．まとめと今後の課題

本稿では、書の鑑賞を通じて、書そのものへの関心の変化、書の表現意欲や教育への発展にどのような変化が表れたのかを、学生のレポートのコメントを対象に分析と考察を行った。

まず、各自が選んだ作品の直感的鑑賞で感じた漠然とした印象の要因が、分析的鑑賞によって、1 つ 1 つ明らかになる過程を楽しんでいる様子がうかがえた。具

体的に①～⑤の観点で分析することで、作品の特徴や工夫が明確になり、他の作品との差異も明示され、書表現の個性や独自性を感じることにつながったことが示された。

また、観点別の作品分析は、書表現の広がりや豊かさを具体的に理解することになり、書表現や文字表現が楽しいものであるという感覚を得られたと言える。それが、子ども達への文字教育や書写教育で「文字を書くことの楽しさ」を伝えたいという意識に結びついたと考えられる。それらを受けて、自身の書字能力や毛筆表現力の向上の必要性にも気づくことができたのであろう。

以上の点から、今回の鑑賞を通して、学生の書表現に向かう姿勢の変化、教員となった場合の指導内容や方法への気づきが見られ、有意義な取り組みであったと言える。

最後に、今後の取り組みを通して感じた課題や改善点を挙げておく。今回の取り組みでのレポートではまとめとしての感想を書かせた。その中で、子ども達への文字教育・書写教育に触れられているが、具体的にどのような指導方法をイメージしているのかが把握できなかった。指導案作成なども取り入れる必要性を感じた。

本稿では第 1 章で記したように「造形性から鑑賞を始める立場」の鑑賞を取り入れた。しかし、実際に学生が取り上げた多くの作品が文字を把握できる、読める作品に大きく偏りが出る結果となった。今回は「書道I」という、鑑賞を主として取り上げる科目ではない中での実施であったため、造形性から書作品を見ることは困難であったと思われる。一方で、鑑賞の結果として、書表現への関心が強まり、鑑賞そのものにも楽しさを見出せていた。今後、書表現や鑑賞に対する関心、そして、書鑑賞に更に広がりを持たすために、取り組みが一時的なものにならないようにする必要がある。他の書写書道科目とも関連付け、さらに発展できる流れを作り、鑑賞に関する実践的研究を継続していきたいと思う。

注

1）全国大学書道学会編（2013）『書の古典と理論』光村図書出版 p.96

2）藤森（2014）p.45

3）中国古典としては，『九成宮醴泉銘』『孔子廟堂碑』『雁塔聖教序』などを中心に取り上げている．

4）林（2017）では，「書論・鑑賞I」でのみえ県展鑑賞レポートの分析結果を取り上げている．「書道I」とは異なり，この科目では授業の際に書論や鑑賞に関する文献を取り上げた上での県展鑑賞であり，本稿で対象とする学生の鑑賞に関する学びは事前に導入した鑑賞観点のみである．

5）2018 年度「みえ文化芸術祭・みえ県展」は第 69 回目を迎え，5 月 19 日（土）～6 月 3 日（日）に開催された．部門は日本画・洋画・彫刻・工芸・写真・書で構成されている．書に関しては，漢字・仮名・調和体・篆刻に分かれており，2018 年度は 100 点の作品が展示されれた．出品者は，県内の活動に留まらず，全国的に活躍する作家も多い．また，作風も偏りが少なく，様々な表現形式を取り上げており，幅広い鑑賞が可能な展覧会と考えている．

6）全国大学書道学会編，上掲書，p.96 を参考としたが，鑑賞に慣れていない学生も多く，初心者にも理解し易い観点を取り上げた．また，鑑賞の最終段階である総合的鑑賞については，作家の背景や意図等までを含む必要があり，今回の鑑賞では取り上げないこととした．

7）みえ県展では調和体とされる表現方法であるが，平成元年改訂の高等学校学習指導要領から取り上げられた「漢字仮名交じりの書」に当たるものである．伝統的な漢字や仮名の作品のような表現にとどまらず，草書や連綿を用いずに文学作品等を表現する方法として，明治以降に生まれた一表現である．また，その表現方法から一般的に読みやすい作品となる傾向がある．

8）小学校中学校国語科書写では，起筆はおよそ 45 度角度で入るように指導している．

引用文献

林朝子（2016）「書を見る観点－日本人学生と中国人留学生へのアンケート調査から－」『三重大学教育学部研究紀要』第 67 巻人文科学

藤森大雅（2014）「書の鑑賞に関する一考察」『大東書道研究』vol.21

藤原宏・永田作治（1978）『書写書道用語辞典』第一法規出版